

窓辺

故郷に母川回帰

宮地 良樹

高校を卒業するまで静岡市で生まれ育ち、大学進学のために京都へ来てから50年の歳月が流れました。くしくもその記念すべき50回



医学大学院
岡社会健康
センター

大に理事長・学長として着任しました。

50年ぶりの静岡は「大きな変容を遂げた」ということとはなく、懐かしい情景が私の追憶の糸を紡ぐように

いまそのまま点滅している。会議の中で「……だもんで」などという静岡の方言を耳にすると、「ああ、故郷に戻ったんだ」と胸が

目の中に、新設されたばかりの静岡社会健康センター。この土地で学び、畏友と出会い、恋に胸を焦がした青春の日々がまるで走馬灯のようによみがえります。

ただ一つ異なる冷酷な事実、私が50年の加齢を重ね高齢者となったことです。この50年間、まさに馬車馬のように半生を駆け抜けてきた生きざまを「いつ

も泳ぎ続ける回遊魚のようだ」と人に評されたこともありません。その「回遊魚」が芙蓉を仰ぐ山河の地に「母川回帰」したのは、いつかは故郷にささやかでも恩返しをしたいという「夢」をかなえるためです。

超高齢社会を迎えた静岡県で、「どうすれば健康寿命を延伸できるのか」という命題を科学的に解明し、その成果を社会に実装・還元することが私たちの大学院の最大のミッションです。自らの「老い」を見据えながら、「高齢化」をキーワードに教育・研究を進める今日この頃です。

静岡社会健康医学
大学院 学長